

国際農林業協力

JAICAF

Japan Association for
International Collaboration of
Agriculture and Forestry

特集：技術移転と人材育成

農業開発に求められる普及人材と農業者の能力開発
公益社団法人国際農業者交流協会における外国人材育成の取り組みについて

JICA 筑波における農業研修受入事業

—農業・農村開発分野の開発途上国研修員及び日本人の人材育成に焦点を当てて—

海外農業開発協力の将来を担う若手コンサルタントを確保・育成する取組

—ADCA セミナーの開催について—

Vol. 47 (2024)

No. 1

公益社団法人
国際農林業協働協会

巻頭言

「技術移転と人材育成」再考

板垣 啓四郎 1

特集：技術移転と人材育成

農業開発に求められる普及人材と農業者の能力開発

板垣 啓四郎 2

公益社団法人国際農業者交流協会における外国人材育成の取り組みについて

清水 利広 9

JICA 筑波における農業研修受入事業

—農業・農村開発分野の開発途上国研修員及び日本人の人材育成に焦点を当てて—

藤城 一雄 17

海外農業開発協力の将来を担う若手コンサルタントを確保・育成する取組

—ADCA セミナーの開催について—

熊谷 徹 25

AU サミット報告

アフリカ肥料・土壌健全性サミット 2024 に参加して

北中 真人 32

世界の農政

中国の食の安定供給 —「食糧」安全保障最重視と「大食物観」—

百崎 賢之 34



海外農業開発協力の将来を担う若手コンサルタントを 確保・育成する取組－ADCA セミナーの開催について－

熊谷 徹

はじめに

高齢化や就業人口の減少、他産業との競合などにより国内の人手不足が深刻化する中、海外農業開発協力の将来を担う若手コンサルタントの確保も近年益々難しくなっている。加えて、海外農業開発協力分野は水や土、森林といった資源を中心として環境との関わりが深く、食料やエネルギー生産とも直接結びついており、貧困や環境劣化といった地球的課題の解決にも中心的な役割を果たし得る分野であるため、これまでに先人たちが培った多くの経験と知見に基づいた高度な分析力・判断力が求められ、それゆえ、モチベーションの高い人材の確保とともにその後の技術者個人のスキルアップや組織的育成が必要不可欠である。

こうした課題に対応すべく、一般社団法人海外農業開発コンサルタント協会（ADCA）は、積極性や行動力、そして失敗を恐れずに前向きに物事に取り組む姿勢を持つ人材の発掘と育成のため、年に一度 ADCA セミナーを開催している。

1. ADCA セミナーとは

ADCA セミナーは、ADCA とその会員コンサルタントの若手中堅職員が一緒になって、2010（平成 22）年度から毎年、我が国の農業農村開発協力の実績を振り返りつつ、将来の世界の農業農村開発の可能性や展開方向について学生を交えて国際協力の関係者と共に考える場として開催してきた。近年は、次世代のグローバル人材となり得る学生・院生に対し、農業農村開発分野で活躍するコンサルタントの生の活動とその魅力を直に伝達することに主眼を置き、当該分野の一線で活躍する講師やパネリストを招いての実施となっている。

2. 2023（令和 5）年度 ADCA セミナーの開催

1）概要

2023 年度は 4 年ぶりに会場開催が可能となったため、対面とオンラインのハイブリッド形式で行うこととした。過去の ADCA セミナー開催大学や ADCA と関係の深い大学（特に国際協力に造詣の深い指導教官）の協力も得て、全国から学生・院生や ODA 関係者等合計約 60 名（オンライン含む）と主催者側 ADCA 会員企業から運営スタッフとして約 15 名（4 名のパネリスト含む）が当セミナーに参加した。さらに、当協会の個人賛助会員である宮崎雅夫参議院議員に第 1 部パ

KUMAGAI Toru: Efforts to Invite and Develop Young Consultants Who Will Lead the Future of Overseas Agricultural Development Cooperation -About Holding ADCA Seminar-

【開催実績】

開催年	開催場所	備考
2010 年	東京大学	n/a
2011 年	北海道大学	参加 335 名。中村哲氏基調講演ほか
2012 年	九州大学箱崎キャンパス	参加 48 名。原田さとみ氏基調講演ほか
2013 年	鳥取大学湖山キャンパス	参加 203 名。坪井達史氏基調講演ほか
2014 年	日本大学生物資源科学部（藤沢）	参加 391 名。Mr. Bolico（FAO 駐日所長）ほか
2015 年	東京農業大学	参加 300 名。黒柳俊之氏基調講演ほか
2016 年	神戸大学	参加 100 名。高橋基樹氏基調講演ほか
2017 年	宮城大学	参加 67 名。三村悟氏基調講演ほか
2018 年	高知大学	参加 45 名。新納宏教授基調講演ほか
2019 年	弘前大学	参加 75 名。北田裕道氏基調講演ほか
2020 年	高知大学・弘前大学	参加 46 名（オンライン）。石島光男氏基調講演ほか
2021 年	高知大学・弘前大学・神戸大学	参加 62 名（オンライン）。進藤惣治氏基調講演ほか
2022 年	高知大学・弘前大学・神戸大学	参加 37 名（オンライン）。高野伸氏基調講演ほか
2023 年	都内会議場（市ヶ谷）	参加 75 名（オンラインとのハイブリッド形式）

ネルディスカッションと第2部グループワークのコーディネーターを務めていただき、セミナーを主導していただいた。

第3部「食べて学ぶ海外の料理」の効果もあつてか、和やかな雰囲気の中で真摯な意見交換や学生間の交流もでき、セミナー参加者からは概ね高い評価を得た（後述、アンケート結果参照）。また、会員企業の側からも海外農業開発に関心の高い学生らと大変有意義な交流・意見交換ができたと好評であった。

2) ADCA 青年会議による準備

ADCA 内には、その会員コンサルタントの若手中堅職員で組織する「青年会議」があり、例年、ADCA セミナーの企画・準備・実施を担当している。2023 年度第1回準備会合は昨年9月1日に開催されたが、今回は久しぶりの対面開催ということもあり、より参加型のセミナーを目指すこととした。その後数次にわたる準備会合を経て、東京をメイ

ン会場とし地方大学からの参加も可能とするハイブリッド形式で開催すること、全体を3部構成とし、第3部は実際に海外の料理を食べながら学生らと若手コンサルタントの意見交換・交流の場とすることを決めた。

第1部パネルディスカッションでは、4名のパネリスト（海外との生中継を含む）の業務報告に加え、会員企業若手コンサルタントを対象とした事前アンケートを実施して、その結果を議論に反映することを企画した。さらに、参加希望者（学生・院生）に対しても、オンライン登録時に事前アンケートの回答と事前質問を依頼した。

第2部グループワーク（GW）は、開発途上国の写真を見て課題や対策を考えること、および国際協力に関わるアクター（政府、JICA、国際機関、コンサルタント、研究セクター、ビジネスセクター等）がそれぞれの立場から何ができるか、の2つのテーマについて6名程度のグループに分かれて議論する

ことを企画した。GW はハイブリッド形式でうまく進行できるのか、参加者の動機も知識量も千差万別な中で会話が停滞し苦痛な時間とならないかなど懸念する意見も多く出たが、失敗を恐れない海外開発コンサルタントの本領発揮でチャレンジすることとした。

第3部ケータリングは、打合せ初期からその実施に異論は無く、海外の料理を囲みながら次世代人材とざっくばらんに意見交換・交流をすることに対する大きな熱量を感じるものであった。

3) 第1部パネルディスカッションの実施

今年度のパネルディスカッションは、「若手コンサルタントの世界一国際協力の舞台裏を紹介！」と題し、ADCA 会員3社から海外経験が5年程度までの若手技術者4名がパネリストとなり、ADCA 個人賛助会員の宮崎議員にコーディネーターをお願いして実施した。冒頭、国際協力と ODA の概要を外務省作成の YouTube も活用しながらコーディネーターから説明を行った後、若手コンサルタントを対象とした事前アンケートの結果をはさみながら、国際協力業界に入ったきっかけや初めての海外業務渡航での成功談・失敗談、関係者との交流や現地での食事・文化の楽しみ方等について語り合った。さらに、ブータン王国に出張中のパネリストとはオンライン中継でつながり、現地の風景を紹介しながら出張先での業務や生活について説明するなど、海外開発コンサルタントならではの魅力が学生らに大いに伝わったと感じている。ただ、予定していた参加者との質疑応答が時間の都合で出来なかったことが反省点として挙げられる。



写真1 コーディネーターによる概要説明



写真2 若手技術者パネリスト



写真3 ブータン王国との中継

次世代人材が何を考え、何を感じ、どんな活動してきたか垣間見るうえで参考となると思われるので、若手コンサルタントおよび学

生院生に対して行った事前アンケート結果を記載する。

【若手コンサルタントへの事前アンケート結果（26名、複数回答あり）】

①国際協力業界に入ったキッカケ

- 9人 人との出会い（青年海外協力隊、国際ボランティア、インターンでの開発コンサル、海外農業実習生、研究室の先輩・同僚、大学教授、中村哲氏の講演、両親）
- 8人 メディア等で昔から興味あり（食糧問題や水不足問題の解消、不公平の解消、テレビ番組、書籍など）
- 5人 専門を活かしたい
- 4人 海外での経験を通して（海外での研究、JICA インターン、青年海外協力隊）

②初めての業務渡航

- | | |
|------|---|
| 渡航国 | アジア（13人）、アフリカ（12人）、中米（1人） |
| 滞在期間 | 1～2ヵ月（10人）、2週間～1ヵ月（9人）、2～3ヵ月（4人）、ほか3人 |
| 役割 | 業務調整のみ（13人）、専門分野に近い分野（7人）、専門分野（3人）、専門分野と異なる分野（3人） |

③初めての渡航で楽しみだったこと

- 12人 現地での生活（文化、食事、現地語・英語での会話）
- 12人 現地の人とのコミュニケーション（海外に仕事仲間を持つ、相手国政府との連携）
- 10人 日本ではできない仕事ができる（道なき道での仕事、国の将来像に携

われる）

- 8人 プロジェクト運営（先輩やチーム員と一緒に仕事すること）
- 5人 現地の課題を実際に見る（観光では感じられない現地の環境）

④初めての渡航で不安に感じたこと

- 18人 仕事全般（うち4人は語学力に関すること）（分からないことが多く責任を果たせるか。多額の現金を管理すること。自分の専門と異なる仕事に対応できるか。）
- 8人 健康面（異なる食生活や環境下での体調維持、ホテルの衛生面）
- 4人 現地生活（現地の時間の使い方。お酒は入手可能か。ホームシック）
- 4人 治安（盗難や強盗への不安）

⑤初めての渡航で最も驚いたこと

- 14人 仕事内容（意外とデスクワークが多い。想像以上に現場が多い。専門分野以外にも様々な知識が必要。事務所の立ち上げが大変。臨機応変に予定が変わる。業務量が多い。TOEICに自信がなくてもどうにかなった。）
- 10人 環境（意外と難なく生きていけた。ホテルの環境が良かった。移動中の道の悪さ。現地の暦に合わせての活動。物乞いが多い。）
- 2人 現地人（日本への印象が良く、人が温かかった。JICA等の知名度が高かった。）

【参加登録者への事前アンケート結果（60名、複数回答あり、当日欠席者も含む）】

①国際協力と聞いてどのような活動が思い浮かびますか？

開発途上国の貧困撲滅・開発支援	28
現地に根付いた長期間の活動	21
日本の技術の海外展開	16
テロや災害時の緊急人道支援	12
外交手段としての活動	8
企業の CSR	3

②国際協力と聞いてどのようなイメージが思い浮かびますか？

国際舞台で活躍してカッコいい	24
様々な国の人と仕事が出来そう	21
人助けをするやりがいがありそう	20
高度な専門性が求められそう	18
ワークライフバランスを保つのが難しそう	12
外国語による会話が難しそう	11
危険そう	10
知らない国に行けて楽しそう	6
少し堅苦しそう	3

③開発コンサルタントについて興味がある話題

開発コンサルタントの役割	23
キャリア・専門性のつくり方	20
開発コンサルタントの仕事の流れ	20
具体的な業務例	16
開発コンサルタントの適正とは	15
英語・第2外国語の必要性、学習方法	15
女性コンサルタントのキャリア	15
会社や相手国関係者との人間関係	12
コンサルタントの待遇	11

【参加登録者からの事前質問（抜粋）】

①キャリアに関するもの

・大学のうちに学んでおいた方が良いことは何か？・大学院に行かなくても活躍できるか？・数年のキャリアを積んだ後にコンサル

タントに就職するものではないのか？・将来的に国連などの舞台で活躍できるようになるのか？・ダムや水利施設などの工学系のイメージがあるが、専門知識が無くても就職できるのか？・文系の大学卒業後に就職することも可能か？

②ライフプランに関するもの

・海外勤務の場合、家庭との両立は可能か？
・海外業務に携わる女性社員で家庭を持つ方がおられたら、海外と日本それぞれの滞在期間や生活のサイクルについて聞きたい。
・女性コンサルタントとして海外でのキャリアと、結婚・出産などの女性としてのライフプランとの両立について聞きたい。

③仕事・生活の内容に関するもの

・現地での安全対策など、どのように管理しているのか？・異文化との関わり方（宗教や文化）について知りたい。
・派遣先（国）はどのように決まるのか？・国際コンサルタントの仕事をしていく中で、どのような障壁に直面したか、どのように解決してきたか？
・国際協力の仕事ではタフな交渉など強いメンタルや自信が必要と考えますが、それにまつわる経験談を聞きたい。

4) 第2部グループワークの実施

ADCA セミナーで初の取組として行われたグループワークでは、「写真から考える、私たちができること－海外開発コンサルタントの視点を学ぼう！－」と題し、現在直面している開発途上国での課題について、学生同士で話し合い解決策を考えてもらった。壊れた灌漑施設、干ばつ、栄養不足の子供、壊れて放置された農業機械、地球温暖化の影響を受けた農地等の写真を用意し、グループ毎に数枚選んで、そこから課題・対応策を考え、

さらには海外開発コンサルタントが取り組むべきことは何かを議論してもらった。会場参加者は6グループに、オンライン参加者は5グループに分かれ、それぞれに第1部のパネリストとADCA青年会議の若手コンサルタントが分担して議論のファシリテーターとして入った。どのグループも活発な議論が展開され、その成果発表では、具体の課題を目の当たりにして何をどう解決していくか真剣に議論された様子が見て取れた。ただ、オンラインのグループでは写真の共有や発言のタイミングが滞る場面が散見され、Web上で参加者が満足する活発な議論を展開することの難しさを改めて感じさせられた。

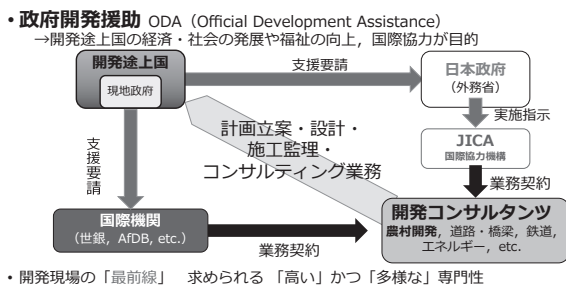
5) 第3部ケータリングの実施

第3部のケータリング「食べて学ぶ海外の料理」では、来場参加者にアフリカ料理（プレヤッサ、ムシカキ等）や東南アジア料理（バインミー、スイーツ等）を提供し、各国料理の紹介をケータリング業者（世界一周料理のVamos）にお願いしたところ、会場からは大きな関心を持って歓迎された（料理紹介が終わるまで退出しないオンライン参加者も）。会食を通じ、国際協力関係者と学生らの交流が深まるとともに、学生同士の新たなネットワーク作りにも大いに貢献した様子であった（思えばこの年頃の参加者は食を通じた密接なつながりが持ちづらいコロナ禍を経験してきている）。主催者側シニアからは世界の飲み物（アルコール）が無いことを残念がる声



写真4 グループワークの様子

開発コンサルタントって何？



1

図1 課題提案スライド



写真5 各地の料理の紹介



写真6 世界の料理（アフリカと東南アジア）

も聞かれたが、参加者の中に未成年者も入るためこの点の改善(?)は次年度以降も望めない。また、オンライン参加者からは羨望怨嗟の声も漏れたが、これもひたすらご容赦を願うばかりであった。

6) 参加者事後アンケートの概要

セミナー実施後、事後アンケートを参加者にメール送信し留学生を含む19名から回答を得た。ADCA セミナーを知ったきっかけは大学教員からが13名で最も多く、その他は、知人友人、ADCA からの案内メール等であった。全体を通しては、満足14名、やや満足4名、やや不満1名で、不満を感じた主な要因は外国との通信不調やグループワークにおけるデータのやりとりに関するものが主で、特にオンライン参加者にはストレスも多かったと思われる(「世界の料理は見ているだけではつまらない」といった意見も)。

内容的には「もっと若手技術者同士のフリートークが聞きたかった」「若手でないコンサルタントの話も聞きたかった」といった改善点も含め、全般的には、「コンサルタント関係者や他大学・他分野の学生と交流ができた」「セミナーを通じて開発コンサルタントの業務内容についての理解が深まり、興味を持つことができた」「大学で学んできたことが案外現実問題の分析や解決策の提示に関係していることを感じた」「なかなか食べられない本場の料理に感動した。アフリカ料理は初めて食べた。参加者同士の会話も盛り上がった」といったコメントを多くいただき、今回のセミナーを通じて海外農業開発の魅力を

十分に感じてもらうことができたと考えている。

おわりに

今回の ADCA セミナーは、その企画段階で従来以上に「参加型」を目指すこととし、その仕組みとして若手コンサルタント主体のパネルディスカッション、セミナー参加者全員が議論に加わるグループワーク、そして、世界の料理を実食しながら学生とコンサルタント、または学生同士の交流を深めるケータリングの3部構成をすることが早々に決められた。知的好奇心にあふれ、世界を舞台に何らかの社会貢献がしたいとの熱い思いを持つ学生・院生が、大学の指導教官の勧めもあって参加してみたら、想像以上に面白く役に立つセミナーだったと感じてもらえたのが実態ではないか。さらには主催者側にとっても若手中堅コンサルタントの発想力・企画力・実行力・指導力の向上やこの業界の魅力の再度の気づきにもつながったのではないかと思う。

今回の ADCA セミナーの開催にあたりご協力いただいた大学関係者、農林水産省、農業農村工学会、JICA、そして、海外技術協力に係る豊富な知識と経験を駆使して本セミナーを成功に導いていただいた宮崎コーディネーターに心より感謝申し上げます。

(一般社団法人

海外農業開発コンサルタンツ協会
企画部長)

「国際農林業協力」誌編集委員（五十音順）

池 上 彰 英	（明治大学農学部 教授）
板 垣 啓四郎	（東京農業大学 名誉教授）
大 平 正 三	（一般社団法人海外農業開発コンサルタンツ協会 前企画部長）
勝 俣 誠	（明治学院大学名誉教授）
北 中 真 人	（一般財団法人ササカワ・アフリカ財団 理事長）
高 原 繁	（公益財団法人国際緑化推進センター 専務理事）
西 牧 隆 壯	（公益社団法人国際農林業協働協会 顧問）
藤 家 梓	（元千葉県農業総合研究センター センター長）

国際農林業協力 Vol.47 No.1 通巻第 210 号

発行月日 令和 6 年 7 月 31 日

発行所 公益社団法人 国際農林業協働協会

編集発行責任者 専務理事 西山明彦

〒107-0052 東京都港区赤坂 8 丁目10番39号 赤坂KSAビル 3 F

TEL (03)5772-7880 FAX (03)5772-7680

ウェブサイト www.jaicaf.or.jp

印刷所 NPC 日本印刷株式会社

International Cooperation of Agriculture and Forestry

Vol. 47, No.1

Contents

Reconsidering Technology Transfer and Capacity Building for Human Resources.

ITAGAKI Keishiro

Technology Transfer and Human Resource Development

Roles of Agricultural Extension Officers and Their Capacity Building for Farmer.

ITAGAKI Keishiro

Efforts to Develop Foreign Human Resources by Japan Agriculture Exchange Council (JAEC).

SHIMIZU Toshihiro

Agricultural Knowledge Co-Creation Programs in JICA Tsukuba: Focusing on Human Resources Development of JICA Participants from Developing Countries and Japanese Next Young Generation in Agricultural and Rural Development.

FUJISHIRO Kazuo

Efforts to Invite and Develop Young Consultants Who Will Lead the Future of Overseas Agricultural Development Cooperation —About Holding ADCA Seminar—.

KUMAGAI Toru

Participating in the Africa Fertilizer and Soil Health Summit 2024.

KITANAKA Makoto

National Food Security in China —“Grain-first Policy” and “Big-food Concept”—.

MOMOSAKI Kenshi